

機能工学系

教員数	教員等数 (人)	教授 29 (28)	助教授 27 (26)	講師 16 (13)	助手 — (2)	技官〔準研〕 — (—)
	異動状況 (人)	退職・転出 5 (6)	昇任 7 (7)	採用 2 (1)	学内 — (—)	
研究活動	研究発表 (件)	論文・著書発表数		学会発表数		
		国内	国外	国内	国外	
		88 (85)	55 (89)	280 (270)	142 (161)	
	受賞数(件)	29 (指導学生の受賞17件を含む) (18)				
	研究費等		採択件数	採択率(%)	金額(千円)	
		科学研究費	35 (29)	50 (38)	137,200(73,502)	
		学内プロ	16 (17)	25 (29)	14,200(12,900)	
奨学寄附金件数・金額		36件	38,530千円	(38件	35,214千円)	
受託研究件数・金額		13件	69,921千円	(10件	46,080千円)	
受託研究員	1人 (1人)					
施設・設備						

・ () は前年度の数値を示す。

1 機能工学系の活動

機能工学系では、本年度も着実に研究教育活動に励み、各分野で着実な成果を上げた。特に、大学院の新体制と平成17年度の概算要求に向けた準備と、学類のJABEE受審のためのカリキュラムの改革にエネルギーが投入された。大学院の新体制は、21世紀COEへの申請等を意識して、それに耐えられる拠点形成の体制を作ることが目的である。また、最近着任した教官が筑波での研究成果をあげはじめするなど新しい方向の研究への展観も図られた。

本学系の運営の特徴は、教授・助教授・講師にいずれも同じ基準で教官研究費とスペースを分配し、研究・教育上できる限り平等に扱っていることである。このことは基本的には学系の若手教官がのびのびとかつ活発に研究・教育に励む環境をうみ出している。また、結果として、ほとんどの教官が学系や学類・研究科の運営にきわめて積極的かつ、協力的であり、これが学系の活力の源となっている。

2 自己評価と課題

現在、大学に対する社会の期待と批判の目は一層大きくかつ厳しくなっている。工学系の学類や大学院に対する産業界の期待は大きく、また、研究面でも大学の成果をより直接的に社会にフィードバックすることが強く求められている。

本学系では従来より、大学では学類生・大学院生の教育こそが基本であり、学系における研究もそれを視野に入れて行われるべきものである、という考え方が中心であった。このため、ほとんどの教官が教育に熱心であり、きわめて積極的に学類・大学院の教育や学生生活の指導に当たっている。また、学系としても、関連する学類や研究科の充実発展を中心的な目的として運営されている。これは本学系が誇りとすべきことであり、現在大学が求められている方向性にも合致していると考えている。

一方、本学系では伝統的に教官各個人の独立性を重視しているため、教官個人単位の研究や比較的小型のプロジェクトが研究の中心になる傾向があった。しかし、研究で目立った成果をあげこれを社会に還元するためには、大型プロジェクトにもさらに積極的に取り組み、大規模な競争的研究資金の獲得等を通して、一層研究アクティビティを向上させることが必要である。今後、これと熱意を持った教育とを両立させて大学の活性化に貢献してゆくことが本学系・関係専攻の課題と言えよう。